



〜シーズン1「SMクラブの受付」〜

エピソード6：文化と迂回

しすてむ♥ロキよたけ

僕は、変態が好きです。変態現象が好き。そこでは、人の欲求が社会と個人の間で何か起きているような気がして仕方ないから。

でも、そもそも変態が何かわからない。変態からすれば、そうでない事柄は、一般的ではないと考えられるので、一般的も変態だったりする。

この両側面がある社会そのものが変態で、面白いと思うし、「両側面」を感じる僕も、同じ社会にいるのだから、僕も紛れもなく変態だと思う。そんな自分を最近愛らしく思っています（自画自賛www）。

さてさて、前回は、雅さんに渡された『SとM』という本を読んで感じたことや、「SMクラブ」という場を通して垣間見えた他者との関係性について綴りました。また、「SMクラブ」が「性風俗」に属しているため、「性風俗」の場から、日常生活において「性」が、どのように捉えられているのかを「性風俗」に関係ある人たちの声から僕の解釈を綴ってみました。それにより僕は、他者

と性的関係を持つことについて、人によって異なる認識をしていると気づいたのでした。

また、SとMという関係性にも触れ、「SMクラブ」におけるサービスとは、何を示しているのかも綴ってみました。ここに対する答えは何も出ていません。しかし、「SMクラブ」という場においては、一般的に歪であるとされる性的嗜好でも、それは場に適した行為にすぎないので、歪だと断言できません。言い換えれば、歪だからこそ、満喫できる出会いがあると感じました。

さて！今回のエピソードは、今までの綴りっぷりに戻し、僕が体験をした「SMクラブ」の受付。とりわけ、初出勤日にフォーカスして綴ってみました。

綴りながら僕は、SMというカテゴリーされる嗜好の持ち主たちの集まりの中に入ってしまったのですが、僕は彼らを歪な人たちだと断定し難かった体験をしたと思っています。

いや、歪だと思っていたかもしれません。だって、何も分からないことから始まったのだから、不思議な世界だと思っていたに違いなかったのですから……。

今回のラインアップは、『1. 日本人の掃除の美学』、『2. 殺伐とする空気と謙虚さの倒錯』、『3. 漂う会話』、『4. お色直しされる画像』、『5. 下ネタの良し悪し』

1. 日本人の掃除の美学

初めて店に店に行った面接日、雅さんから「トイレは座ってするように」と言われた。また、トイレは、キャストと客、受付が利用するので、トイレトペーパーを使った場合は、必ず三角折りにするようにと

も。僕は、そのルールに気品を感じた。座って用をたすのは、小便で床や便器を汚さないようにするためだ。また、三角折りにするトイレトペーパーは、日常的に自ら行う行為ではない。清掃後のトイレで見受けられるよう、非日常的な行為だとも思う。

日本のトイレは、綺麗だ。「綺麗に」なんて言われなくても、自分が店の人間で、人を受け入れる立場であるという認識を持てば、了解してしまう。

僕は、綺麗なトイレを通して、日本人の日常的な行為と非日常的な行為に気づかされたのだった。次に使う人に向け考えられている日本人のマナーを垣間見たかのようだった。

トイレマナーについて、ここまで強く考えさせられたのは、主に過ごしているキャ

ストの女性を意識したからかもしれない。男性だけが使うトイレであれば、そこまで考えなかつたらう。

2. 殺伐とする空気と謙虚さの倒錯

11時半頃、店に到着した。ドアを開けると「カランコロン」と鈴が鳴った。ズドンと見える狭い階段をのそのそと歩き、受付と待機室がある2階へ上がった。

その途中で、2階入り口の引き戸が開いた。ミカサさんの顔が見えた。

受付は、1人体制だ。この日は、初日の面接日に居たミカサさんが受付で、店長の雅さんはお休みだった。

「清武です。よろしくお願いします。」「はい。靴を脱いでこちらへ。」

ハスキーな声で、ゆっくりと返って来る言葉。僕は、ハキハキした口調で挨拶をしたものの、突如緊張感に襲われていた。

ミカサさんのハスキーな声は、狭く薄暗い空間にマッチしていて、殺伐とした雰囲気を感じたからかもしれない。雅さんの柔らかな雰囲気と違い、恐い印象を受けた。

「来たらず、掃除をします。今日は、何もなくていいので、私がしていることを見て覚えてください。」「あ、わかりました。」

これまでしてきたバイトでも、だいたいこんな感じで教えられてきた。だけど、奇妙だった。

一つ目は、仕事内容とファッション。受付といえば、一般的に事務仕事なので、オフィス系の服装を思い浮かべる。風俗店で

も「箱（店舗型）」だとスーツを着た男性がいる。しかし、ミカサさんの服装は、ゴスロリ系というのだろうか？アナスイが好きそうな雰囲気の人で、薄いストッキングを履いていたのだった。

二つ目は、ファッションイメージと言葉遣い。そもそも僕は、ゴスロリ系？ファッションの人から「掃除を見ておくように」と指示されたことが、これまで、一度もなかった。それだけでなく、ハスキーボイスで無表情。だけど、口頭で伝えるのではなく、見せて教えようとしてくれていた。僕は、業務を学ぶというより、彼女の仕草に引き寄せられていた。きっと僕は、何か異なった文化圏に入り、異なりに意識が向いていたのだと思う。

この違うと感じた体感、動きから見て学ぶことも多いにあるということが、呼び起こされていた。裏を返せば、一般的に言語を使って教育されることが多いからなのではないだろうか。

3. 漂う会話

僕は、ほぼ初めて会う人と密室で二人きり。ミカサさんは、PC に座り、黙々と何かしていた。片や僕はというと、やる事がなかった。

こういう時、互いに妙に居心地が悪い。ミカサさんは、PC と向き合いながらも、チラチラと僕の方に視線を向けていた。僕は、部屋の中を彷徨っていた。

僕は、「何してるんですか？」と尋ねていた。「レタッチ」、「・・・それって何ですか？」、

「北海道の子の写真の修正をします。」、「へー。北海道ですか？」彼女と同じモードを探しているかのよう、仕事をしに来た僕も何か業務を探し、場に見合った過ごし方を探していたのだと思う。

結局僕たちは、実務についてではなく、おしゃべりを始めた。その中で、店舗がいかに展開されているのかまで垣間見ることになった。

「北海道」と違う地域のことを、彼女が、なぜこの地で行っているのか、わからなかった。

例えば、飲食業界のチェーン店のよう、店舗名が違うだけだと思えば、解釈は早かっただろう。次のような解釈だ。SM クラブにも系列店舗（性風俗の母体）があり、その地の地域にも店がある。それだけだ。しかし、他の店舗の仕事を当たり前のように自店舗の業務として行っていたので、なぜ、当然のようにしているのか？納得できなかった。やらないといけないからやる、と単純に考えられなかったのだ。

解釈し納得したのはもっと先のことで、この日はそのまま話題は展開された。僕の頭は、さらに混乱した。

「北海道の店に男の子なんだけど、女装子じゃなくて、トランスでもない人がいます。ちょっと、修正した方が可愛いと思って」、「へー・・・。見ていいですか？」、「どうぞ」。

当時の僕は、性風俗店といえば、「キャスト＝女性」思っていたため、不思議なこととして受け止めていたのだと思う。しかし、

売専があるよう、男性が男性を対象とした店舗もあるし、働いていた SM クラブは、「女性」と限定しているわけでもなかった（多くは女性であったが）。

つまり、「性風俗」で働く人のジェンダーに対する、固定観念こそが、不思議さを感じた機微だったのだ。こう思うのは、僕だけじゃないかもしれない。当たり前かのように、多くの「性風俗店のキャスト」は、「女性」であると認識されているのではないだろうか。いや、男性を対象にしている場にいるキャスト（人）は、女性という解釈がなされている可能性もあるのでは？詳しい方は、様々なセクシャリティの人がいる店があることを知っているだろう。また、「SM クラブ」のようにマニア向けと位置づけられている店があることも知っているだろう。

4. お色直しされる画像

ミカサさんは、椅子を少しずらし、PC を覗かせてくれた。「あ・・・確かに可愛いけど、どこか勿体無い感じがしますね。でも、そのままでも女の子に見えるっすねー」、「そうでしょー。でも、ちょっとメイクを入れるともう少し可愛くなるので」、「あ、ほんまや」。

レタッチとは、一般的には、画像修正・加工。最近の性風俗店の HP で見かけるのは、「写真の加工なし」だ。「加工」はしていないのだけど、修正されていないわけではない（ただ、大幅な修正が、されている写真は少ないと思われる）。

しかし、彼女の話からするとレタッチの意味は変わる。メイクアップだと思った。目元や口元にシャドウを入れる、唇の色を抑える、背景の色を濃くする・コンセントなどを消す。顔にする化粧に加え、写真全体に化粧を施し、その人の印象を表現していたのだった。

5. 下ネタの良し悪し

レタッチを見せてもらった後、その人のセクシャリティの流れで、性的嗜好の話をしてきた。僕は、いろいろな性癖を持つ人がいることや性行為の相手として求める性は様々だと改めて気づいた。下世話な話に聞こえるかもしれないが、世の中にはこんな話題だってある。覚えている限り触れておきたい。

どんな AV が好きかという話から、同性との性的行為はできるのか否か、同性でも異性っぽいと思う振る舞いとはどういうものかと展開されていた記憶がある。そして、僕は、残念なことに(?)SM 嗜好じゃない人だと位置づけられた。

僕は、割と下ネタを真剣に話すことが好きだ。ただ、誰にでも、どこでもするわけではない。下手すればセクハラになりかねないし、見知らぬ人にいきなり話せば変人扱いされるのだから。

性行為の多くは、一般的に親密な関係の相手とする行為だからこそ、誰にでも開示しないという選択も必要だと思っている。

性行為は、誰にでも言う話題ではないから、行為を行う相手と創り上げていく、相

互行為であると思う。しかし、親密であるからこそ、そこでの性行為の事情を第三者に伝えることは、そう多い話ではないようだ。

しかし、性的な話をせずにいれば、性的行為にまつわる話は、いつまでもタブーな話題として扱われるか。

例えば、ネットで検索すれば無数に性的な情報は転がっているよう、誰にも言わずして性的な話題や映像に遭遇することもできる。

この情報を鵜呑みにして、性行為をする人もいる。AV を見よう見まねにやってみる人たちもいて、身体を傷つけるだけの行為になることもある。性的興奮を誘発させるために作られた過激なフィクションだと知らずして真似てしまう可能性もあるだろう。一方が現実の性行為で AV と同じことをしたいと思えば、もう一方は、相手のことが好きゆえに、断れなさが性行為に内包されてしまうだろう。並行して、真似てする方も感情を理由にして、行っていいと判断していることもあるだろう。

これらは、自分の体は自分で守らなければならないという構造になりかねない。もちろん、自分の身体を自分で守ることは大事なことだが、大事だと言われたからと言って、すぐにできるわけでもないと思う。

こんな具合で考えているから僕は、下ネタとしてちょけることもあるが、真面目な話題として解釈していたりする。

上記は、SM クラブの受付初日と関係ない話である気がするが、そうでもない気が

する。ここに来る客たちは、自分の性的嗜好が、逸脱や性的倒錯と言われる行為であると分かって、これを満たし合う相手が日常におらず、たどり着いている。中には、プレイはほとんどせず、SM の話だけをして帰る客もいたようだ。

誰にでもして/されていい行為ではないという前提が社会にあることを知って、たどり着いたのだと思う。これは、キャストも同じだろう。ちゃんと「SM クラブ」にたどり着く変態を侮ってはならない。変態と自覚すると自ら動き、場を見つけていくようだから。

今回は、キャストと過ごす受付としてのしすてむ♥口きよたけについて触れていきたいと思う。初日に行った実務的なことを綴っていくのだろう。一通り 1 日の流れを見せてもらい、シフトを記入したことくらいだったと思う。次の出勤日から、身も心もてんやわんやだった。

誰からも連絡きませんが、絶賛解禁中！

『清武システムズ限定コース解禁!!ルート about 熟女コース』

綴り人/しすてむ・きよたけ

清武システムズという看板を引っさげ、活動中。現場に置いていただき、何かに反応し動き始め、それを通しそこで起きていることを整理して、また動き始める状況変化装置です。アイデアや意見ではなく具体的な変化のための装置。

「何か変化を求めているが、手立てがわからない。」そんな時にぜひ導入を！

【連絡先】

info@kiyotakesystems.net

ツイキャスでラジオ始めました。その名も「カッテに喋らNight!」。カッテに喋りたい人、カッテに聞いて過ごしたい人募集中。

Twitter アカウント@SystemKiyوです。

今のところ不定期ながらに、水曜日の 22:00〜行っています。清武システムズHPに録音のリンクを貼る予定です。